水とともに生きる

鹿児島修学館中学校　一年　山本咲綺恵

私の家の近くには甲突川が流れている。鹿児島市の真ん中を流れ，錦江湾にそそぐこの川は，全長二十キロメートル以上あり，市内で最も長い川だ。中流には浄水場があり，私たちの大切な生活用水となっている。

かつて甲突川には，五石橋と呼ばれる大きな美しいアーチ型の五つの石橋が架かっていた。造られたのは，およそ百八十年も前，江戸時代だ。接着剤なども使わず，石の重さと摩擦を利用して造られた。文化財としても非常に価値のあるものだ。鹿児島が薩摩藩であったころは，この石橋と甲突川を防衛線や，関所としていた。しかし，私は甲突川でこの橋を見たことがない。一九九三年八月六日の水害で新上橋と武之橋が崩落し，残された橋は石橋記念公園に移設されたのだ。

八・六水害では，数日前から雨が降り続いていたことと，満潮と大雨が重なったことに

より甲突川が増水し，川からあふれた水によって約一万二千戸が浸水の被害を受けた。二メートル以上の浸水を受けた場所をあったという。その原因の一つとなったのが，老朽化していた石橋であった。壊れた橋の残骸に水が押し寄せることで，被害が拡大してしまったのだ。他にも原因の一つとなったのは，山を切り開いて造られた大規模な団地の存在であった。貯水能力が下がってしまった山から大量の水が一気に流れ出した。それに加え，鹿児島は火山噴出物であるシラスにおおわれている。シラスは吸水性が高いが，水を含めば含むほど，もろくなる性質がある。それによって，崩れたときは水と一緒に土砂が流れ出す。この時も水と一緒に大量の土砂が流れ出した。この水害のあと，残された石橋は移設され，川底が掘り下げられ，護岸工事が行われた。それ以来，大きな氾濫は起こっていない。

だが，これだけで良いのだろうか。水をコ

ントロールするだけではなく，私たち一人ひとりが「水とともに生きる」という考え方を持つことが大切なのではないだろうか。

今，甲突川はメダカの住めるきれいな水が流れ，河原の清掃活動なども行われている。川とふれあうイベントもたくさん開催されるようになり，みんなが川や水について考える機会も増えてきた。水は循環している。川の水は私たちの生活用水となり，使用された水は排出されていく。そして処理され，再び海に帰る。海から蒸発した水は雨となって山に降り，集まって川となる。はるか昔から続いてきたこの循環を絶やさないために私たちに何ができるのだろう。まずは節水を心がけること。浄化処理に負担がかかるものを流さないこと。そして，水について考え続け，自分にできることを続けていくこと。

甲突川の源流である甲突池は，鹿児島市内の八重山の中腹にある。空気まで澄み渡っているようだ。八重山には美しい棚田も広がっ

ている。その棚田もこの水があればこそだ。そのため，この池の水は，穣（ゆたか）の水とも呼ばれている。平成の名水百選にも選ばれており，地域の方々が掃除などを行い，先祖代々大切に守り続けている。水を大切にし，水とともに生きている。この思いや努力を私たちが無駄にしてはならない。そして，未来につないでいかなくてはならないと思う。